

■研究十二月往来(372)

切り取られた風景

—〈熊野〉の車—

小田 幸子

能の作り物には、リアリズム劇の舞台装置と異なる特色がいくつもある。まず、演出や演技と緊密にかかわる場合に用いるのが第一要件であって、情景描写や雰囲気作りのためにだけ使用することは基本としてありえない。ただ、何も無い空間に作り物を出す大变目立ち、独特な形状とあいまって副次的な効果がいろいろ生まれることになる。そして、場合によっては副次的効果の方が強い印象を与えることすらある。小考で取り上げる「車」は、船・輿など他の「乗り物」と同じく一義的には「人物の移動」を意味するが、車の代表というべき「物見車」（「花見車」と称する牛車を模した作例は、赤を主体とした色合いと大胆かつ繊細な形態を持ち、移動本来の意味を越えて、舞台を華やかに彩る効果が高い（「椅

子車」や「土車」など地味な車もある）。物見車（以下「車」と称する）を用いる作品には、（住吉詣・〈熊野〉をはじめ、桜の枝を差した〈右近〉・〈小塩〉の華麗な車があり、今は通常出さないが〈葵上〉や〈野宮〉の原作で用いていた〈花筐〉の天皇や〈蟬丸〉の蟬丸も、古くは車に乗っていた例がある。どの場合も、乗車人物は貴人など高位の人体だから、車は身分の表象でもある。また、夢幻能・現在能の区別なく用いており、前場にも後場にも使用することが知られる。

上記の作品中注意されるのは、ほとんどが「人物が車に乗って登場する」設定なのに対して、〈熊野〉だけが劇の途中で車に降り降りる点である。もっとも、乗車の際には後見が車を舞台に設置し、その後人物が中に入ると

いう手順に変わりは無いのだが、車と人物の登場が一体化している他曲とは使い方が違うし、車の搬入だけでなく搬出にも手数を要する（シテが車を降りると、車を撤去する。なお、『岡家本江戸初期能型付』によると、観世流では車を二両出す伝承があったという）。車の使用には相応な注意が込められているに違いない。以下、〈熊野〉における車の用法と効果を検討しよう。

〈熊野〉の主要場面は①宗盛の館、②清水寺までの道行、③清水寺境内へと大きく転換するが、②に車を用いることによって場所の変化が実に鮮やかに表現される。「移動」の本義を最大限に生かすだけでなく、視覚に訴えて単調になることを避けている。細かい場面変化を苦手とする能舞台における巧みな工夫といえよう。

第二に、車の枠で取り囲むことによってシテの姿に観客の視線を集める、クローズアップ効果があげられる。いわば額縁に入れた状態であって、これが、さまざまな舞台効果を生み出す仕掛けとなっている。たとえば、地名に応じて、シテが遠くを眺めたり、右左を見まわしたりする所作が際立ち、空間移動が

生き生きと表現される。観客席に向かつて張り出した目付柱付近に車を置くので(過去には他の位置に置くこともあった)、シテの立ち位置が通常より近く、親密感が増すことも付け加えておこう。

②の宗盛館から清水寺に到る長大な道行文は、車中から眺める春の情景が、シテの感慨を伴いながら、多くの地名を織り込みつつ描写される。これらの場所と道筋は、特に京都の人々にとって常に目にする馴染深いものであつたらう。そして、言うまでもなく、これらすべてはシテの目によって切り取られた情景にほかならない。「心は先に行きかぬる、足弱車の、力なき花見なりけり」(心の進まぬ、しかたなく出かける花見であることよ。以下、観世流大成版の本文に依る)と、身体は花見へ向かうが、心は付いていかない。現実目にする花盛りの都と、遠い故郷の病む母とに、体と心が引き裂かれているシテの状況は帰国を許される終盤まで続くのだが、そのために、なにげない都の風景が特別な意味合いを帯びてシテの目に映じることになる。

前半は音羽山の山桜や東山ののどかな景色、四条・五条の橋を行き交う人々など「九重の

花盛り」の様子に目に留めているが、後半の「ロンギ」に至ると、母親を気遣う感情と地名の結びつきが強まっていく。地藏堂の観音に「たらちねを守りたまへや」と祈るものの、「頼む命は白玉の」(母の命はいつ消えてしまいかわからない)と不安になり、不吉な名を持つ「六道の辻」(珍皇寺門前)に到ると、「げに恐ろしやこの道は冥途に通ふものなるを、心細鳥辺山、煙の末も薄がすむ」と冥途を連想し、さらに亡骸を焼く鳥辺山の煙まで見てしまう。車窓に移り変わる都の風景をぼんやり眺めつつ不安感を募らせていく道行き場面は、まるで映画の一シーンを見ているようにリアルである。シテが「車」という閉ざされた状況に置かれているからこそ生じる効果であろう。

こうした車の用法は他曲にはなく、作者の並々ならぬ力量を示しているが、確認の意味で他曲についてざっと見ておくことにする。

〈右近〉・〈小塩〉・〈住吉詣〉の車には、あまり複雑な意味合いはない。もっぱら絵画的美しさが主体とみてよいだろう。〈花篋〉の車は、華麗な行列と容易には近づけない天皇の地位を示しており、行列の前に進み出て制止され

るシテの行動に緊迫感を与える。逢坂山に捨てられる蟬丸の車は皇子の身分からの転落を強く印象づける。〈葵上〉・〈野宮〉で六条御息所が乗るのは「加茂祭の車争い」事件によって破損した車であり、傷つけられた自尊心の象徴として、シテの内面と深く関わっている。〈熊野〉の場合はごく現実的な車を場面変化やシテの心情変化に効果的に用いているところに特色があろう。

〈熊野〉の根底には、死と滅亡の予感が満ちている。母親の死の予感だけではない。「この春ばかりの花見の友」と述べる宗盛のセリフから連想するのは、やがて訪れる平家一門の都落ちと滅亡である。「クセ」の冒頭、清水寺の鐘は諸行無常の声を響かせ、地主権現の花の白色は盛者必滅を示す。宴席でシテが舞うと、俄に村雨が降ってきて「今までは盛りと見えつる花を散らす」(下掛り)。今、目の前にありありと見えている満開の花も、花に彩られた都も、そこに暮らす人々も、そう遅くないうちに滅びていくのである。〈熊野〉は、桜花と死を本格的に結びつけた最初の舞台作品かもしれない。

(日本大学芸術学部講師)